

赤ひげ診療譚「むじな長屋」(山本周五郎)

—

梅雨にはいる少しまえ、保本登は自分から医員用の上衣を着るようになった。薄鼠色に染めた木綿の筒袖と、たつづけに似たその袴^{はかま}とは、よく糊^{のり}がきいてごわごわしており、初めて着たときには、人にじろじろ見られるようでかなり気まりが悪かった。

新出去定と森半太夫は黙っていたし、彼が上衣を着はじめたということにさえ、気づかないふりをしていた。他の医員たちも口ではなにも云わなかったが、彼を見るたびに皮肉な眼つきをしたり、唇にうす笑いをうかべたりするのが認められた。——こういう中で一人だけ、彼のためによろこび、それを正直に口に出して云った者がいた。それは台所で働いている、お雪という娘であった。お雪は登が上衣を着ているのを見るなり、まあと手を打ち合わせ、顔じゅうでこぼれるように微笑した。

「ようやく上衣をお召しなさいましたのね、よかったこと」とお雪は云った、「これでやつとあたしの勝ちになりましたわ」「おまえの勝ちだつて」登は訝^{いぶか}しそうに訊いた、「誰かと賭^かけてでもいたのか」

「ええ」お雪はちよつと狼狽^{ろうばい}しながら、巧みに微笑でそれをつくらつた、「賭けたといえど賭けたんですけれど、あたし保本先生がそういうお気持ちになつて下さるようになって、願つて

いたんですの」

「そういう気持とは、どういうことだ」

「この養生所におちついて下さるというお気持ですわ」お雪は勇敢に云つた、「あたしなんか云うのはおかしいでしょうけれど、ここにはいいお医者さまが必要ですし、本当に医者らしいお医者なら、ここでお仕事をなさる気にならない筈はありませんもの、それでしよう」

登はそのとき気がついた。

——森半太夫の口まねだ。

お雪が半太夫を恋しているということは、津川玄三に聞き、また狂女おゆみに付添っているお杉からも聞いた。半太夫は無関心らしいが、お雪は夢中になっているという。森さんのお堅いのは立派だけれど、お雪さんの気持を考えると憎らしくなる、とお杉は云つた。登自身もときどき、二人で話しているようなところを見たことがある。通りかかった半太夫をお雪が呼びとめて、ちよつと立ち話をするといった程度であるが、いつかいちど、薬園の柵^{さく}のところまで、お雪が泣いているのを見かけたことがあつた。——晩春^{たんすがれ}の黄昏^{たそがれ}だつたと思う。半太夫は腕組みをし、棒のように立つて空を見あげており、その脇でお雪が、袂^{たもと}で顔を掩^{おほ}つて泣いていた。かなりはなれていたうえに、登はすぐ眼をそむけて去つたが、うすく露^{もや}のかかった、片明りの光の中で、二人の姿は影絵でも見るような、非現実的なものかなしさを感じさせたものだ。

——たしかに、これは半太夫の口まねだ。

登はそう思いながら、さりげない調子でお雪に云つた。

「それは森の意見なのか」

お雪はわるびれずに頷き、微笑した、「ええ、森先生もそう仰しゃっていますわ」

「おれにはおれで意見があるさ」そう云ってから急に登は顔をしかめ、突つかかるような口ぶりになった、「森は自分をごまかしているんだ、誰だって本心は出世をしたい、名をあげ産をなすことは、人間本来のもつとも強い、正当な欲望だ、赤髯はいいさ、彼はもう名医として知られているし、大名諸侯や富豪などから、礼を厚くして迎えられる、しかも門戸を構えもせず、こんな施療所で働いていることは、彼の名声をさらに高めるだけだろう、しかしおれたちはそうじゃあない、おれたちは無名の見習医だ、こんなところにいつまでもいれば、生涯無名のままで終るほかはない、おれはそんなことはまっぴらだ」

「疲れていらつしやるのよ、保本先生」とお雪は勉むるように云った、「そんな意地わるなことを仰しやるのは、お疲れになつてゐる証拠よ、いつておやすみなさいましな」

登は両手を垂れ、そして歩み去つた。

彼は恥ずかしくなつた。お雪などにそんなことを云つたのが恥ずかしいばかりでなく、自分のしていることと、いま云つた言葉とに矛盾を感じたからである。いまお雪に云つたことは誇張でも片意地でもない、常に考えていることを正直に口に出したまでであるが、その反面、彼はこの養生所での仕事と、新出去定とにつよくひきつけられていた。——嫌つていたその上衣を、すすんで着るようになったのは理由がある。

けれども、彼の考えに変化が起こつていなかったら、とうていそんな気持にはならなかつたであらう。理由といつても変

つたことではなく、単に一人の病人の言葉にすぎないからだ。伝通院の前をさがつた中富坂に「むじな長屋」と呼ばれる一画があり、そこは極端に貧しい人たちが住んでいることで知られていた。登は去定の供で、しばしばそこへ治療にいくうち、輻屋の佐八という病人を受持つようになった。年は四十五六だろう、骨太でがっちりした軀をしているが、明らかに労咳にかかつており、見かけの逞しさとは逆に、激しい衰弱と消耗が認められた。

——どうか本気になつて養生するように仰しゃつて下さい。差配の治兵衛は幾たびそう云つたかわからないし、去定もくり返して、きびしく安静を命じた。佐八はおとなしく承知をする。また、発熱や咳のひどいときには、仕事を休んで寝るようだが、少しでもぐあいがいとすぐに起きあがつて仕事をやる。それをみつかつて咎められると、大きな顔でそれたように笑い、頭を掻きながら続けざまにおじぎをして、いかにも済まなそうに云うのであつた。

——もうこれで片づきます、これが片づいたらすぐに寝ます、本当に寝ますから。

佐八は若いころいちど結婚したが、僅か半年ばかりで別れてしまい、それ以来ずっと独りぐらしだという。腕も相当だしよく稼ぐけれども、例のないほど無欲で、稼いだものはみな人のために遣つてしまい、自分はいまだに家財道具も満足に揃つていない、と差配の治兵衛から聞いたことがあつた。その佐八が或るとき、不審そうに登のようすを眺めながら、貴方はどうして養生所の上衣を着ないのか、と問いかけた。あれは官制ではないからだ、と登は答えた。去定が独断でき

めたもので、べつに規定されたものではない。だから着ようと着まいと勝手なのだと云った。

二

佐八は登から眼をそむけながら、独り言のように呟いた。

——あの上衣は人助けですがね。

彼はそう云った。

——あれを見れば養生所の先生だということがすぐにわかります、私どものような貧乏人は、養生所へはいきたがらないものですが、通りかかった先生を見れば、治療に寄っていただきたい人間がたくさんいます、私なんぞはなにより有難い上衣だと思いますがな。

その上衣はべつの意味をもっていた。動作に便利なのと、清潔さを保つこと、患者の汚物でよごれたりすれば、すぐに取換えられることなどで、仮によごれなくとも、夏は毎日、冬は隔日に着替えるきまりになっている。去定はそういう点でもちい始めたのであろうが、佐八の言葉を聞いて、そこにも意味のあることを、登はひそかに承認したのだ。

「いい気なもんだ」

お雪と別れて自分の部屋へ帰りながら、彼は自分を嘲るように首を振った。

「人間本来のもつとも強い正当な欲望か」と云って彼は唇を歪めた、「——おまけにこの、立派な上衣を着ていながらさ」

去定の部屋の前まで来たとき、障子の向うで呻くような去定の声が聞えた。呻くというより咆えるというほうに近く、

短い一と声だったが、登はふいに水でも浴びせられたように感じ、いそいでそこを通りすぎた。そして廊下を曲ると、森半太夫が自分の部屋の障子をあげ、はいれという手まねをした。

「なにか用か」

「話があるんだ」と半太夫は云った。

「まだ朝飯まえなんだ」

「御同様だ、はいってください」

登はしぶしぶ森の部屋へはいった。

「どこへいつていたんだ」

「どこにも」と登は肩をすくめた、「飯まえにちよつと歩いて来ただけさ、それがどうかしたのか」

「おれは、——」と半太夫はどなりかけたが、じつところえて、静かに云った、「新出さんがひどく気を昂ぶらせているから、そのつもりでいてくれといいたかったんだ」

登は黙った。

「さつき与力から呼び出しがあつて、新出さんは詰所へいった、いっしょに來いと云われておれもいったんだ」と半太夫はややひそめた声で云った、「呼んだのは松本三左衛門どの、肝煎の小川氏（所長）も同席で、かよい療治の停止と、経費三分の一を削減すると云われた」

かよい療治はずっと以前に停止されていたのだ、と半太夫は説明した。養生所の増築をし、入所患者の数をふやすと同時に、正式にはかよい療治は許されなくなった。しかし実際には不可能なことであった。入所する患者を七十余人から百五十人に増しても、かよい療治に來る者は年間に少なくて三

百五十人、多いときには七百人を越すこともある。その大部分が貧困のため町医にはかかれないのだから、泣きつかれれば治療してやらないわけにはいかない。しぜん一人ふえ二人ふえして、いつか元どおりになってしまった。

「そうして、新出さんが医長になってからまもなく、黙許というかたちで、半ば公然と治療できるようになった」と半太夫は云った、「ところが、いまになっていきなりまた停止されたうえに、養生所せんたいの経費を三分の一も削るというのだ」

「それは、——」と登が反問した、「それにはなにかわけがあるのか」

「將軍家に御慶事があつて、諸入用が嵩むからという理由らしい」

「御慶事だつて」

「なんでも御寵愛の局が姫を産んだので、將軍家はひじょうによろこばれ、それを祝うためにいろいろな催しがあるそうだが、はつきりとは云わなかったが、与力はくちうらでそう句わせていた、それで新出さんは怒った」

將軍家に慶事があつたのなら、罪人を放ち金穀を施与するのが当然ではないか、去定はそう云いたかつたのだ。怒つた理由はその点であるが、そんなことを云える立場でもなし、云えば上を謗ることになる。

「経費削減のことは承知しました、と新出さんは云われた、しかし、かよい療治を停止することはできません」半太夫はそこでちよつと言葉を切り、まるで怒号するように声をひそめて続けた、「——かれらは貧窮し病んでいるのです、施療の

停止は、そのままかれらを死へ追いおとすことです、私にはお受けできません、もういちど御詮議を願います、——そう云うなり立つて、出て来てしまわれたんだ」

話しているあいだに、朝食を知らせる板が鳴った。二人はその音を聞きながら、どちらも立とうとはしなかったし、半太夫の話が終つてからも、暫くじつと坐っていた。

「小川氏はどうなんだ」やがて登が眼をあげて訊いた、「あの人はどっちの側に立っているんだ」

「どっちでもないだろう、本当なら彼がその折衝に当るべきだ、養生所の責任者なんだからな」と半太夫が云った、「しかし彼はその席に坐つていただけだし、——と言もものを云わなかった、——おそらくどっちの側の人でもないだろうな」

そして半太夫は立ちあがり、「飯にしよう」と云つて登を見た、「新出さんを怒らせないように気をつけてくれ」

登は自信がなさそうに黙っていた。

去定は午前ちゆう不機嫌だった。むろん怒っているようなそぶりはみせないし、荒い声をあげるわけでもないが、不機嫌で苛いらしていることはようすでわかつた。入所患者の診察から、調剤書を書き終るまで、半太夫と登はずつと法定に付いていたが、なにかあるたびに、二人は互いに眼で警戒しあつた。

——なかなかいいようじゃないか。

登は心の中でそう呟いた。森半太夫という人間が急にちかしく、また好ましく感じられたしたこと、しかもそれが少しも不自然でないことにおどろきを感じた。

——少なくとも津川より人間らしい。

津川玄三が「田舎者ですよ」と輕侮したことを思いだし、自分も同じような眼で見ていたことは忘れて、森にはまなぶところさえありそうだ、などと思うのであった。

調剤書が終ると、去定は外出の支度をしながら登を見た。

「むじな長屋の佐八のぐあいはどうだ」

「べつに vari はないようです」

「では先に廻るところがあるからいつしよに来てくれ」

半太夫と登は廊下へ出た。半太夫は調剤所へはいろいろとして、登に振り返りながら云った。

「氣をつけるよ」

登は微笑しながら頷いた。

三

去定のいった先は松平吉岐守邸であつた。それは牛込御門をはいつて約二丁、定火消のあるちよつと手前だつたが、そこへいき着くまで、去定は絶えまなしに独り言を云い続けた。

「かれらにそんな権利があるのか、あるとすれば誰に与えられたのか」去定は片手の手首だけを振る、「乱世ならともかく、天下は泰平であり秩序もとのつてゐる、幕府の權威は天下を押えてゆるがず、四民は怯々とその命にたがわざらんことを怖れてゐる、かれらにはなんでもできるのだ、どんな無法なことでもどんなに残酷なことでも、幕府の名をもつて公然と押しつけることができる、そして現にそのとおりやつてゐるんだ」

「おれはごまかされないぞ」と去定は下唇をそらす、「おれは

老いぼれのお人好しかもしれないが、こんなふう人間を愚弄するやりかたに眼をつむつてはいない、人間を愚弄し輕侮するような政治に、黙つて頭をさげるほど老いぼれでもお人好しでもないんだ」

ほんの暫く独り言がとだえた。去定は大股の歩度をゆるめながら、片手で髯をこしこすとこすつた。「無法には無法を」と去定は呟いた、「残酷には、残酷をだ、——無力な人間に絶望や苦痛を押しつけるやつには、絶望や苦痛がどんなものか味わせてやらなければならぬ、そうじゃないか」

長いことそういう憎悪の独り言が続いた。去定の心は怒りと憎悪とで、どす黒く沸きたつてゐるらしい。彼は幕府閣僚を呪い、ついには、そういう権力に対する自分の無能を呪つた。しかしやがて、牛込御門をはいつたとき、去定は力なく首を振り、右手の手首だけで、なにかをぬぐい去るような動作をした。

「いや、そうじゃない」と去定はくたびたように呟いた、「おれにはそんなことはできない、おれはやつぱり老いぼれのお人好しだ、かれらも人間だということを信じよう、かれらの罪は眞の能力がないのに權威の座についたことと、知らなければならぬことを知らないところにある、かれらは」と去定はそこで口をへの字なりにひきむすんだ、「かれらはもっとも貧困であり、もっとも愚かな者より愚かで無知なのだ、かれらこそ憐れむべき人間どもなのだ」

薬籠を背負つて、登といつしよに供をしていた竹造が、吉岐さまのお屋敷です、とうしろから吃りながら声をかけた。去定はびっくりしたように立停り、左手を見て、それから竹

造を睨みつけた。竹造は困ったように登を見、登は門番小屋のほうへ歩みよつていった。

去定と登は脇玄関からあがつていった。

接待で茶菓のもてなしがあり、川本鞆負という家老が挨拶に出た。去定は茶にも手をつけず、挨拶が終わるとすぐに、「今日は薬礼をもらつて帰るから御用意を願いたい」と切り口上で云つた。金五十兩と聞いて鞆負は、とつぜん額を小突かれでもしたように、ぐいと顎を反らした。

「そのうち十兩だけは小粒にしていたきたい」と去定は平気な顔で云つた、「では先日のを拝見しましょう」

「御診察は」

「献立を拝見してからです」

鞆負はいそいで出ていった。

「吉岐どのは三万二千石だが、奏者番をながく勤めているので内福だ」と去定は云つた、登に云つたのか独り言かよくわからないが、その口ぶりには嘲笑のようなひびきが感じられた、「なんの五十金や百金、どうせ自分で稼ぐわけではなし、痛くも痒くもないだろう」

そしてまた口の中で、なんの五十金や百金、といまいましてに呟いた。

まもなく岩橋隼人という用人が来て、巻紙に書いたものを差出した。五日間の献立表で、むろん吉岐守の膳にのせるのだろう、去定は矢立を取つて、記してある品名を次つぎと消し、そして数行の品目を書き加えた。

「百日間このとおりに差上げて下さい」と去定は巻紙を隼人に返しながらかつた、「鳥肉卵は厳禁です、魚介と塩梅もこの

指定を越えてはなりません、飯はこのまへにも固く申した筈だが、精げた米はお命をちぢめるばかりですから、麦七に米三の割をきつと守つて下さい」そして隼人の返辞を待たずに、ではお脈を拝見しようと言つた。

吉岐守の診察には登も立会わされた。吉岐守は四十五歳だそうであるが、絵で見た海象のように肥満し、坐っているのも苦しうであつた。腹部は信じがたいほど巨大で、身動きをするたびにゆたゆたと波を打ち、顎の肉は三重にくびれて、頸は見えず、じかに胸へ垂れさがつていた。顔はまるく、頬は張り切れるばかりにふくれ、そのために眼がふさがれて細くなつていた。——去定はなにもせず、下段からじつと眺めるばかりだつた。脈をみようともしない。ただじつと、憐れむような眼で、ものも云わずに眺めており、すると吉岐守はしだいにおちつきをなくし、息苦しうに襟をゆるめたり、懐紙で口を拭いたりしながら、ぜいぜいと喉を鳴らせた。

「ただいま御膳の品書を拝見いたしました」とやがて去定が云つた、「かねて申上げるとおり、お上は御病氣ではなく、御病氣よりはるかに好ましくならぬ状態におわすのです、どこかに疾患があるなら、疾患を治療すればよろしいが、お上のお軀は厚味の御膳を多食なされるため、内臓ぜんたいに脂が溜つて衰弱し、吸収と排泄の調和がまったく失われているのです」約四半刻、去定は容赦のない口ぶりで、吉岐守を威しつけた。聞いている登も、途中で威しだと気づいたが、それにしても、食事の制限のきびしさにはおどろいた。飯が麦七米三、鳥や卵を禁ずることは接待で聞いたが、吉岐守を前にして用人に繰り返すのを聞くと、その量と内容とは、極貧者の食事

にも劣るものであった。白い革袋のように肥えふくれた吉岐守の顔には、表情らしい動きは殆んど見られなかったが、その小さな細い眼だけに、怯えた幼児のような怖れと、悲しそうな色があらわれていた。

「貧しい人間が病気にかかるのは、大部分が食事の粗悪なためだ」接待へ戻ってから、去定は登にそう云った。「金持や大名が病むのは、たいてい美味の過食ときまつている、世の中に貪食で身を亡ぼすほどあさましいことはない、あの恰好を見るとおれは胸が悪くなる」そして唾でも吐きそうな顔をした。

用人の岩橋隼人が金を持って来ると、去定は薬を調合すると云つて、薬籠をとりよせた。そして用人が去ると、小粒の十両の中から二両だけ紙に包み、これを持ってむじな長屋へいけと、登に云った。

「おれは黄鶴堂へ寄つて、それから廻るところがある」と去定は云つた。「経費削減となると、まず薬に手を打たなければならぬ、黄鶴堂の主人を云いくるめるのは一と仕事だろうが、——まあいい、先にむじな長屋へいつて、治兵衛にこれを渡してくれ」

登は紙包みを袂に入れて立ちあがつた。

四

中富坂の長屋へ着くちよつとまゑに、すっかり雲に掩われて雷が鳴りだし、差配の住居へはいるとたんに、激しい夕立が降りだした。——治兵衛は草鞋を作っていたが、登を見る

と、それを抛りだすようにして立ちあがつたなり、養生所へ迎いをやったところだと云つた。

「佐八が吐血したものですから」と治兵衛は傘を出しながら云つた、「——使いの者にお会いでしたか」

「いや、よそへ廻っていたのだ」と云つて登は紙包みを治兵衛に渡した、「これを新出さんから頼まれて来た」

治兵衛は傘を下に置き、黙つたまま、両手で押し戴いて受取り、仏壇の中へしまった。それからもあい傘で路地へはいり、どぶ板を踏みながら佐八の家へいつた。その一帯は土地が急に低くなっているため、強い降りになるとたちまち水が溢れる。小石川堀へ通ずる大溝への排けが悪いから、——そのときも、僅かなあいだにどぶ板が浮きかかつており、長屋の女房たちがどしゃ降りの中で、いさましく排け口の塵芥をさらつていた。

佐八の住居は長屋とはなれていた。もとはそこも長屋だったが、七年ほどまゑに崖崩れがあつて潰され、端にあつた一軒だけが残つた。崩れた土が多量なので、家主は建て直すことを断念したが、佐八は自分で手を加え、その残つた一軒だけを切りはなして、住めるようにしたのだという。——七年のあいだに、崩れた土の多くは水で洗われ、いまでは殆んど平らな空地になつているため、家主はまた長屋を建てる氣になつたそうで、そこへは古材木が運びこまれているし、地均しも始めている、ということであつた。

佐八の住居には治兵衛の妻のおごがいた。

「よく眠つてますよ」おことは登に挨拶してから、亭主にそう囁いた、「ときどきおかしなことを云うけれど、きつと熱

のために云ううわごとでしょう、苦しいのはおさまったようですよ」

「先生はよそへ廻っていらつしたんだ」と治兵衛は坐りながら云った、「使いが戻ったら先生はいらしたと云つてくれ、その傘をさしていいたら、すぐに一本届けといてくんな」

おことが出ていったとたんに、真上の空で劈くような雷が鳴り、おことの悲鳴が聞えた。家ぜんたいが震動したような感じで、治兵衛は戸口へとびだしていき、路地の向うを覗いてみた。なにごともなくあったのだろう、「子供みてえなやつだ」と呟きながら、戻つて来て坐った。登は病人を眺めていた。

「一刻ばかりまえですが」と治兵衛が話した、「うちの嬢に粥を持たせてよこすと、ええ、昨日の午から寝ていたんで、粥を拵えて持つて来させると、その仕事場で倒れていたんだそうです」

六帖と二帖の住居にくつつけて、三坪ばかりの板敷の仕事場がある。佐八が自分で造つたのだらう、天床もない板壁の、掘立て小屋のようなもので、車の輻を作る材料や道具類が、一枚敷いた薄縁のまわりにちらばっていた。——おことが来たとき、佐八はそこに倒れたまま呻いており、板敷に血が流れていた。おことの知らせで治兵衛が駆けつけ、寢床へ入れるとまた吐血した。

「金盥へ半分も吐きましたよ」と治兵衛は声をひそめて云つた、「抱いているこっちも吐きそうになりました、私はてつきりこれでいっちまうもんだと思いましたよ」

佐八がふつと眼をあいた。

「おなか」と云つて、佐八はあたりを見まわした、「おなかど

うして来たんだ」

静かな、はつきりした声であつた。

「別れたかみさんです」と治兵衛が登に囁いた、「十七八年もまえに別れたんですがねえ、ええ、おなかという名前でしたよ」

佐八の眼は一点で停つた。

「来なくつてもいい」と佐八はまたはつきりした声で云つた、「もうすぐにおれもいく、もうまもなくだから、ああ、そうだとも、もうそんなに待たせやあしないよ」

彼は微笑しながら、そこにその人がいるかのように、やさしく頷いて、そしてまた眼をつむつた。治兵衛は登の顔を見た。

「うわごとだ」と登は云つた。

「死ぬ病人はよくこんなふうなうわごとを云うもんです」と治兵衛が囁いた、「だが私はこれをいま死なせたくない、どんなことをしてももういちど丈夫にしてやりたい、この佐八は、まるで神か仏の生れ変りのような男だったんですよ」

私もつい四五日まえに知つたのだが、と治兵衛は腕組みをし、声をひそめて語つた。

佐八が長屋の人たちのために、稼いだものを惜しげもなく遣つていく、ということとはまえにも聞いた。自分はまるで着る物も着ない、酒はもちろん煙草も吸わず、食う物さえ詰められるだけ詰め、そうして余しただけを全部、隣り近所の困っている家族に貢いだ。——この事實は長いことわからずにいた。このむじな長屋のような、極貧者の集まるところでは、長く定住する者は稀で、三年も経つとすっかり顔ぶれが変つ

てしまふくらいである。佐八のしたことが長いあいだ知れなかったのも、佐八が固く口止めをしたのと、貢がれた相手が次つぎに去つてしまつたからだらう。五年まえに佐八が病んで倒れたとき、初めてそれが治兵衛の耳にはいった。

「私はそのときほどほどにしろと云つてやりました」と治兵衛は云つた、「自分が病んで倒れるまで人にしてやるばかがあるか、ほどということを考えろ、つてどなりつけました」

佐八は済まないとあやまつたそうである。彼を倒したのは労咳であつたが、医者にかかうともせず、十日ばかり寝ると、起きて仕事をはじめた。彼は治兵衛に向かつて、これからは迷惑をかけないように氣をつける、自分の身のことを考えるから、と約束したが、実際にはその約束を少しも守らなかつた。――病状が思わしくないので、治兵衛がむりに去定の診察を求めたところ、去定から嚴重な養生を命じられた。

「ところがです」と治兵衛は組んだ腕をとき、両手を膝へ突き立てながら云つた、「つい四五日まえにわかつたんですが、相変らず人に貢いでいる、滋養になる物をこれこれと、新出先生から金をいただいているので、薬といつしよにきちんきちんと嬢に届けさせました、いちどにやつては安心ができませんので、一日分ずつ届けさせたんです、これなら大丈夫だろうと思つたんですが、――聞いてみるとそれも人にやつていたんです、米も、魚や鳥や卵など、おまけに薬まで人にやつていたんだそうです、薬までも、ですよ先生」治兵衛のひそめた声が、怒りのためにふるえた、「――なんと云いようがありませんか、私はのぼせあがるほどはらが立つて、いきなりここへとなりこみました」

登は病人の顔を眺めていた。

―― いったいなんのためだろう。

佐八のげっそりと骨立つた顔を眺めながら、登は心の中でそう呟いた。佐八のしたことは常軌に外れている。思い遣りが深い、などという性分だけでは、そこまで人に尽せるものではない。治兵衛は「神か仏の生れ變りのような」と云つたが、登にはそうは思えなかつた。もつと現実的な、むしろ、人間臭いなかの理由があるのではないか、というふうなものが感じられたのであつた。

佐八が深い太息をつき、また眼をあいた。血のけを失つた白い唇に微笑がうかび、誰かに向かつて頷いた、「きれいだ、うん」佐八はこんどもはつきりした声で云つた、「おまえはきれいだ、そのえくぼがなんともいえないよ、おなか、こつちへおいで」

そして突然、佐八の顔に恐怖の表情があらわれた。骨立つた頬が硬ばり、大きく眼をみひらき、白く乾いた唇がふるえて、歯があらわれた。

「その子、――」と佐八はしゃがれた声で呻いた、「いけない、その子はいけない、この子を見せないでくれ、その子をそつちへやつてくれ、そつちへ」

佐八は固く眼をつむつて喘いだ。

そのとき裏の空地のほうで、けたたましい叫び声と、狂つたように犬の吠えたてるのが聞えた。このあいだに雷は去り、雨もあがっていて、裏の叫び声の中に「骸骨だ」と云う言葉が、はつきりと聞えた。

治兵衛はそつと立ちあがつた。

保本登は黄昏^{たそがれ}がたまで佐八の側^{そば}にいた。

差配の治兵衛は裏の騒ぎを聞いて、ちよつと見て来る、と云つて出ていったまま、一刻^{とき}ちかくも戻つて来なかつた。病人はすっかりおちついたようすで、半ば口をあけたままよく眠っているし、登はひどく腹がへつてきたので、帰るためにそつと立ちあがつた。すると、そこへ治兵衛が戻つて来た。

「どうも済みません」と治兵衛は手拭で額を拭きながらあがつて来た、「裏の地均しをしているところで、人足たちがいやな物を掘り出したもんですから」

「私は帰る」と登が声をひそめて云つた、「病人はよく眠っているし、急変のおそれもないようだ、眼をさましたら薬をのませて、重湯の濃いのをやってくれ」

「夕飯をいかがですか」と治兵衛が云つた、「ろくなものはありませんが、いまばあさんが支度をしていますから、よろしかつたらめしあがつて下さい」

登は礼を云つて断わり、その長屋を出た。

養生所へ帰ると、ちようと食堂^{じきどう}の終つたときで、森半太夫だけが残つてい、登はその隣りに坐つた。板敷に板張りの、がらんとした食堂はすっかり片づいており、もう行燈^{あんどん}も二つしかないため、あたりはひっそりと暗かつた。当番の給仕はお初という中年の女で、汁は温めてくれたが、焼魚と菜の煮浸しは冷えていた。

半太夫は茶を飲み終つて、そこを立ちながら云つた。

「あとで私の部屋へ来てくれないか、こつちからいつてもいいが、——ちよつと話したいことがあるんだ」

「今日は疲れてるんだ、いそぐのか」

「留守に天野というお嬢さんが訪ねて来たんだ」

登は足をすくわれでもしたような顔で、箸^{はし}を止めながら半太夫を見た。

「天野のまさをさんという人だ」

半太夫はそう云つて、食堂から出ていった。

「またお残しなすつたのね」お初が半太夫の膳を片づけに来て云つた、「お雪ちゃんのお給仕じゃなければ氣にいらなにかしら、あたしが番のときに森先生がきれいに喰べたつていうためしがないんですから」

登は黙つて喰べていた。

給仕のせいではない、半太夫は春さきから食欲がおとろえていた。お雪の当番のときは、お雪の哀願するような表情に負けて、むりにも喰べるようであるが、そうでないときや、おかずの氣にいらなときなどは、箸を取るのが苦痛だといふふうにさえ、みえることが少なくなかつた。

病氣があるんだ、食欲のないのは病氣があるからだ。

それもおそらく労咳^{ろうがい}であろうと、登はまえから推察していた。自分では氣がつかずにいるのか、それとも、多くの病人がそうであるように、氣づいていながら事実^{じじつ}に眼をそむけているのか、どちらともはつきりとはわからない。去定は半太夫を愛しており、治療には必ず彼を伴うし、外診で留守にするときは、あとのことを彼にすっかり任せている。自分の後継者^{けいしや}にと思つているよう^{よう}にみえるが、彼の健康についてはな

にも云わないうである。去定の眼に、半太夫の軀からだのむしばまれていることがわからない筈はない。医者の不養生ということもあるし、身近な者には却かえって注意が届かないということもあるが、去定ほどの人にそんなことは考えられない。

——たぶん知っているのだろう。

そして、「そうだ」と登は思った。いつか、去定は生命力と医術について、こういう意味のことを云った。或る個こ軀こは病気を克服するが、他の個軀は負けて倒れる。医者はその症状と経過を認めることができるし、生命力の強い個軀には多少の助力をすることもできる、だがそれ以上の能力はない。また、医術がもっと進歩すれば変わってくるかもしれないが、それでも個軀のもっている生命力を凌しのぐことはできないだろう、というのであった。

「医術ほどなさないものはない、と云ったな」登は茶を嚙すずりながら呟いた、「——医者をながくやっていればいるほど、医術というものがどんなに無力かということがわかる、そんなふう云っていた」

そう呟きながら、登は急に眼をあげた。彼は頭の中で、同時に幾つかのことを考えていたのである。佐八のことと、半太夫のことと、それから、留守にまさをが訪ねて来たということ。そのまさをのことが、とつぜんはつきりと意識の表面にうかびあがって来、彼はひどく鬱陶しい気分におそれた。

食堂を出た登は、そのまま自分の部屋へはいった。するとまもなく半太夫が来て障子の向うから声をかけた。登は気乗りのしない声で、どうぞと答えた。

「少し蒸すようだな」と半太夫が云った、「ここをあけておこう」

窓の障子をあけてから、彼は坐った。

「今日はまったく疲れているんだ」

「避けるのはむだだよ」と半太夫が云った、「はつきり事実につつつかつて、さっぱりするほうがいいんじゃないか」

「ちぐさのことなら聞くまでもないよ」

「じゃあなぜまさをさんに会わないんだ」

「おれが、会わないって」

「ここへ訪ねて来て、一刻以上も待ったことがある」と云った、「いることはわかっていたが、どうしても会ってくれなかった、と云っていたがね」半太夫は軽い咳をして、続けた、「——今日は私が応対に出たんだ、すると、ぜひ話を聞いて、保本さんに伝えてもらいたいことがあるという、たいへん思い詰めているようすなので私の部屋へとおしたんだ」

「聞きたくないね」と登は首を振った、「ちぐさのことなんか聞きたくない、胸がわるくなるよ」

「それならなおさら、きれいに吐き出してしまうがいい、問題はほかにあるんだ」

登は疑わしそくに半太夫を見た。

「天野さんは保本をここから出して、御目見医おめみえいにする手配をしているそうだ」

登の唇がきつと一文字になった。

半太夫は話しだした。

天野源伯が法印ほういんで、幕府の表御番医を勤めていることはまえに書いた。源伯と登の父の保本良庵とは、古くから親しい

友人であり、お互いの家族もしげしげ往来していた。天野には祐二郎という男子と、二人の娘があった。登は保本の一人っ子だったが、どういうわけか、源伯は自分の子の祐二郎よりも登が鼻^{ひな}真^まで、登の顔さえ見ればにこにこし、おまえはひとかどの人間になるぞ、と繰り返し云うのであった。

——残念ながら祐二郎はだめだ、あいつは遊芸人にでもなるつもりらしい、しょうのないやつだ。

舌打ちをして、だがおれにも責任があるようだ、深酒ばかりやっていたときの子だから、などとも云っていた。こうして登が十九ちぐさが十四のときに婚約ができ、やがて、登は長崎へ遊学することになった。そのときちぐさは十八になっていた。顔だちも軀つきもゆつたりとして、もの云いもごくのびやかに、ひと言ずつゆつくりと、まをにおいて話す調子が舌でも重いように感じられ、それがときには少女のようでもあり、またひどくおとなびた印象を与えるときもあった。

「長崎へ立つまえに結婚したいと、ちぐさという人は云ったそうだ」と半太夫は云っていた、「天野さんもそう望んだが、保本は断わったという」

「遊学のまえに結婚することなどできるか、婚約してから四年にもなるし、遊学の期間は三年だった」

「相手は十八歳だ」と半太夫が静かに遮^{さへり}った、「女のほうから祝言を望むのは、それだけの理由があったのだらう、保本にとつては遊学ということが第一だったが、十八歳になる女にとつては」

登は激しく首を振り、「よしてくれ」と乱暴に云った、「書生と密通して出奔した女のことなんぞ、聞くだけでも耳のけ

がれた」

「つまり」と半太夫が少し皮肉な調子でやり返した、「つまりそれは、みれんがあるということか」

登の唇がまた一文字にひき緊った。

「怒らずに聞いてくれ」と半太夫は云った、「もしみれんがないのなら、もう相手をゆるしてやってもいい筈だ、その夫婦は天野さん一族と義絶のままで、いま子供が生れようとしているそうだ、天野さんにとつては初孫だし、ちぐささんのほうでも母親の手を求めている、ここで保本が怒りを解き、天野さんにとりなせば、親子は元どおりになれるんだ、そうしてやる気持になれないか」

「まさをはそれを頼みに来たのか」

「もう一つは、保本をここから出そうという話だ」と半太夫が云った、「ここへ入れるように奔走したのは天野さんではなく、保本のお父上だったそうだ、ちぐささんの事で保本にまちがいがあつてはいけない、気持のおちつくまで預かってもらう、という約束で入れたのだということだ」

だが、天野源伯は初めから反対しており、長く養生所などに置いては却つて本人のためにならない、かねて約束したとおり、自分が御目見医の席を手配するから、なるべく早くここを出すようにと、話をすすめているそうだ、と半太夫は云った。

「それから、もし保本がその気持になつてくれたら、じかに会つて話したいことがある、とも云っていた」半太夫はそこでやわらかに微笑した、「——十七になられるそうだが、まさをさんはこまかく気のまわる、きれいで賢いお嬢さんじゃな

いか、保本のことか心配で気もそぞろという感じだったよ」

六

その夜、登はなかなか眠れなかった。

昂奮して眠れなかったのではなく、静かな反省と悔いのためというに近かった。彼の頭の中で、ちぐさのおもかげが初めて、幼な馴染としてよみがえり、彼に向かつて赦しを乞うように思えた。——ひどくおとなびてみえるときでも、ちぐさは自分の思うことを口には出せない。口にだせないだけでなく、そぶりにあらわすこともできない、というふうであった。登はそれを不注意に見すごしていたのだ。ちぐさはおくてのうえに、暢わんびりした生れつきで、まだ女らしい気持になつていない。結婚などはもつとさきのことだ、と思つていた。

「小さいじぶんから見馴れていたので、却つて眼が鈍つていたんだな」彼は夜具の中でそう呟いた、「——もしそこに気がついていたら、長崎へゆくまえに結婚していたらうし、事情はすっかり変つていたに違いない」

おくてで暢わんびりしていて、まだ恋ごろなどとはまったくあるまい、と思つていたために、裏切られた痛手も大きかったのだ。

「おれは自分のことだけにとらわれていたようだ」やがてまた彼は呟いた、「おれをここへ入れたのは、父が天野さんに籠絡ろうらくされたのだと思つた、父は昔から天野さんには頭があがらなかったし、おれの将来についても天野さんに頼りきつていたからな、——おれはちぐさを憎み、父を、天野さんを憎み、

おまけにこの養生所まで憎んだ」

登は顔をしかめながら、枕の上で頭を左右に振つた。

「ちぐさは自分のしたあやまちで傷ついた、天野さんも、父も、それぞれの意味で傷ついた、そのなかで、おれ一人だけ思いあがり、自分だけが痛手を蒙まもつたと信じていた、いい気なものだ」彼はもつと顔をしかめた。

「いい気なものだ、——ここへ来てからのことを考えてみる、おい、恥はずかしくはないか」

登は夜具の中で、身をちぢめた。

明くる朝、少し寝すごした登が、おくれた朝食をたべ終るとまもなく、むじな長屋から迎えの者が来た。佐八の容態がおかしいから来てくれ、というのである。去定はすぐにいけと云い、一帖の粉薬を渡して、もしひどく苦しむようだったら、これをのませてやれと云つた。

「必要がなかったら持ち帰つて、おれの手へ返せ」と去定は云つた、「ふつうには使われない薬だから忘れないように気をつけてくれ」

登は支度をしてでかけた。

伝通院の脇までいったとき、横丁から走り出て来た中年の女が、登を見て呼びとめた。養生所の先生かと訊くので、そうだと答えると、子供の病気が悪いから診てもらえないか、と激しく喘あえぎながら云つた。半年ばかり病んでいるが、溜たまっている薬札が払えないために医者が来てくれない、子供はいまにも死にそうにみえるのだ、と訴えるのであった。

——この上衣のおかげだな。

その上衣は、養生所医員だということを示している。薬札

がとどこおっているために医者が来ない、女は家をとびだして来て、その上衣を認めるなり呼びかけたのだ。赤髯か、いいおやじだな、と登は思った。

「養生所へおいでなさい」と彼は女に云った、「私も危篤の病人があつていく途中だから、養生所へいつて頼むがいいでしょう、もうひと走りですよ」

女は礼を述べて、小走りに坂を登つていった。

佐八の家には治兵衛と、相長屋の者だろう、女が二人いて病人の世話をしていた。若い女房のほう火鉢で湯を沸かし、老婆はしきりに古畳を拭いていた。明け方に少し吐血し、いましがたまた多量に血を吐いたのだという。金盥がまにあわなくて、半分は畳へ吐いたそうで、老婆は湯で雑巾をしぼつては、丹念に畳の目を拭いていた。

「ゆうべ重湯を少しと、卵の黄身を半分ばかりたべたそうです」と治兵衛は呟いた、「ばあさんは泊るつもりで、蒲団まで持つて来たんだが、どうしても病人が承知しないそうでした、今朝はまだ暗いうちに来てみたら、よごした物を自分で片づけていたそうです」

登は佐八の枕許へすり寄つた。

佐八は眠っているらしかったが、眼も薄くあいているし、口は下顎が外れでもしたように、力なくがくりとあいていた。顔色はどす黒く、まったく生気を失い、頬肉はそぎ取つたようにこけて、皮膚が顎のほうへ皺をなしてたるんでいた。

「もうもちますまいか」

「そうらしいな」登は枕許からはなれた、「もう人間の手には負えないようだ」

「こない人」と治兵衛は太息をつきながら云った、「ろくでもない娑婆塞げがうじゃうじゃいるのに、こない人間をとられるなんて、神ほとけを恨みたくありませんよ」

若い女房が登に茶を淹れて来た。

「今日は裏が静かなようだな」登は茶には手を出さずに訊いた、「地均しは終つたのか」

「いや、町方の調べがあるので、それが済むまで手がつけられないのです」

「なにかあつたのか」

治兵衛はいやな顔をし、それから、声をひそめて語つた。裏の崖崩れの跡を均していたら、蒲団に包まれた死骸が出て来た。すっかり腐つて、殆んど骨ばかりになつていたが、蒲団の綿がしつかりしていたためだろう、頭から手足まで揃つており、若い女だということも、着物の残り切れや、たつぷりある髪の毛などすぐにわかつた。——七年まえ、崖崩れで土が動いたから、元の場所はつきりわからない。潰された長屋より上にあつたと思えるが、その状態から察すると、殺して埋めたものに相違なく、今日は町方が調べに来る筈である、と治兵衛は云つた。

「骨になつていようでは、よほど古い死骸なんだな」

「善能寺の墓掘りに見せたんですが、十五年くらい経つているだろうと云つてました」

「殺して埋めたと、どうしてわかつた」

「棺桶らしい物が見えませんが、病死したものならまさか蒲団に包んで埋める、なんということはないでしょう」と治兵衛が云つた、「しかし、もし墓掘りの云つたように、十五年も

まえのことだとすれば、こいつはちよつと調べようがないでしょうな」

戸口に人の声がし、五十ばかりになる男がひよろひよるとはいって来た。ずんぐりした軀つきで、めくら縞の長半纏を片前さがりにだらしなく着、よれよれの平ぐけをしめていた。頬から顎へかけて、まっ白な無精髭が伸びており、禿げた頭は油でも塗ったように、てらてらと赤く光っていた。ひどく酔っているのだらう、絶えずよろめきながら、充血した眼でこつちを覗きこんだ。

「はいって来ちゃあだめだ」と治兵衛が手を振った、「病人の容態が悪いんだからだめだ、帰んな帰んな」

「いまね、町方の旦那がたがね、来てますぜ」とその男は云つた、「差配を呼んで来いってね、おまえさんたしか、まだ差配じゃなかったかい」

七

「よけいな口をきくな」と治兵衛はきめつけてから、登に向かつて云つた、「お聞きのとおりですから、私はちよつといつて来ます」

登は頷いた。

治兵衛がその男と出ていくと、手伝いの老婆も、うちをみて来ると云つて、裏口からたち去つた。するとまもなく、治兵衛といっしょに出ていった男が、一人でふらふらと戻つて来、あいそ笑いをしながら、上り框へどしんと腰をおろした。「だめよ平さん」若い女房が勝手から出て云つた、「差配さん

に怒られたばかりじゃないの、御病人に障るから帰つてちようだい」

「養生所の先生です」男は登に向かつて云つた、「おらあ平吉つてもんで、新出先生とは古い馴染です、ええ、このむじな長屋では佐八とおいらがいちばん古い店子でしてね、その佐八が重病だつてえのに、おいらに会わせてくれねえ、——そこにいるお松なんぞはよそから来たくせにしやがって、病人に障るから帰れなんてぬかしやあがる」

「酔つてなければ云やしないわ」と若い女房が云つた、「酔つてる平さんは事のみさかいがつかないんだもの、差配さんだつてそう云つたでしょ」

「うるせえうるせえ」平吉という男は首を振つて遮つた、「おらあ九つの年から飲み始めて、四十年ちかいあいだ酒の気の切れたことのねえ人間だ、素面のときは知らねえが、酔つてるときに事のみさかいのつかねえようなためしはありやあしねえ、嘘だと思ふなら赤髯の先生に訊いてみる」

平吉はそこでにやつと笑つた、「——いつか赤髯先生がおれに云つたつけ、おれがやけ酒を飲みすぎて、妙な物を吐いてぶつ倒れたときだ、先生はこんなおつかねえ顔をして、病気になるほど飲む金があるんなら、ちつとは女房子のことも考へろつてな、冗談じゃねえ、ええ、先生は外側からおれのこを見るからそんなことが云えるんだ、おらあそ云つてやつた、いっぺんおいらのような人間の心の中へへえつてみてくれつて、……金持や学のある人なら、これはしちやあいけねえとか、こうしちやあ損だからこうしようとか、為になることとならねえことの区別ができるだらう、が、そいつは金や

暇があるか、学のある人間のこつて、おれつちにやあそんな器用な芸当はできやあしねえ、そうじゃあねえか、おれつちのような人間は夜昼なしに稼いでも、満足におまんまも食えねえ、毎日々々、今日はどうやって食おうか、今日は凌ぎがついたが明日はどうする、嬢がとやについた、がきが生れそうだ、店賃が溜って追い立てをくつて、どこでどうくめんしたらいいか、——毎日毎晩、何十年となくそんなくらしをしているんだ、ええ、外側から見ればただ飲んだくれてるよ、うにみえるだろうけれども、心の中はそういつたようなもんだ、冗談じゃあねえ、嬢やがきのことなんぞ考えてみる、とたんに飲まずにやあいらなくなるんだから」

佐八が呻き声をあげ、なにか云った。登がすり寄って覗くと、あなたに話がある、としやがれ声で、囁いた。

「お松さんも、平さんにも帰ってもらつて下さい」

登は頷いて、二人にそのことを告げた。

平吉は立たなかつた。お松はうちに用もあるからと云つて、すぐに帰っていったが、平吉はぐずぐず文句を並べ、しまいにはそこへごろつと寝ころんでしまった。

「そのままにしておいて下さい」と佐八が云つた、「それで眠つてしまふでしょう、——済みませんが水を一杯いただけませんか」

登は平吉の寝ぐあいを直してやり、それから病人の湯呑を取つて、火鉢にかかつている鉄瓶の湯を注ごうとした。しかし佐八は水が欲しいと云つた。

「もう、なにを飲んでもいいのじゃありませんか」佐八は弱よわしく微笑した、「どうぞお願いします」

登は勝手へいつて水を汲んで来てやつた。

「私は貴方が、その上衣を着て下さるようになったので、うれしく思つてました」佐八は水を一口すすつてから云つた、「それでまた何十人かの貧乏人が助かることでしよう」

登は来る途中のことを思いだし、おまえの云うとおりだった、と心の中で答えた。

「いま平吉の云つたことも、ただ飲んだくれのくだだと、笑つてしまわないで下さい、貧乏人はたいいてい、あんなふうに考えているものです」と佐八はまた云つた、「一日々々がぎりぎりいっぱい、食うことだけに追われていると、せめて酔いでもしなければ生きてはいられないものです」

「それもわからないことはないが、中には佐八さんのような人もいるからな」

「私ですか」

佐八はぼんやりとそう云い、湯呑を取つて、寝たまま巧みにもう一口水をすすつた。

「私は、この長屋の人たちに、自分がなんと云われているか、知っています」佐八は湯呑を置いて云つた、「差配の治兵衛さんが、新出先生や貴方に話したことも、みんな聞いていました、——とんでもない、勿体ない、みなさんはなにも知らないから、私のことを褒めたりするんです、本当のことを知ったら、私がどんな人非人かということを知ったら、みんなは睡もひっかけやしないでしょう」

「話というのはそのことか」

「そうです」と佐八は頷いた、「これまでは誰にも云わなかつたし、人に気づかれはしないかと、いつもはらはらしていま

した、しかしもう、私も長いことはない、今日のうちか、もつても明日いっぱいでしょう、いや、なにも仰しやらないで下さい、つまらないことを云うとお思になるかもしれないですが、昨日から迎えが来ているんです」

登は黙っていた。佐八の口ぶりはむぞうさだが、ひやりとするほど実感がこもっていて、登は一種の圧迫を感じたのであった。

「聞いていただきたいのは女房のことです」と佐八は穏やかに話した、「名前はおなかといつて、私とは三つ違い、知りあつてから一年めに夫婦になりました」

のろけのように聞えるかもしれないが、そこを話さないとわかつてもらえないから、不愉快だろうが、辛抱してもらいたい。そう断つてから、佐八は語りだした。

彼はもと下谷の金杉に住んでいた。親方の家に住込みで、やはり車の輻を作る職人だったが、早く亡くなった両親は、奥州のどこやらの出だと聞いただけで、彼は十五の年にみなし児になり、親方夫婦を親ともみよりとも頼んで育つた。おなかは隣り町の「越徳」という呉服屋の女中で、知りあつたときは二十一になっていた。初めて口をきいたのは春の早朝のことで、佐八は新吉原からの帰りだった。——友達とのつきあいで、前の晩おそく京町の妓楼に上がり、友達は居続けときめたが、彼は親方の気を兼ねて、一人だけさきに帰った。外はようやく白みかけた時刻で、大音寺の前まで来ると、雨がぱらついて来、彼は裾を端折って、小走りに道をいそいだ。

八

春の雨だとたかをくくっていたが、金杉の通りへ出ると降りが強くなり、やがてどしゃ降りになった。佐八はままよと思ひ、手拭をかむつた頭からずぶ濡れになりながら、ゆつくり歩いていくと、若い女中が呼びかけ、印のある番傘を貸してくれたのである。

——どうせ濡れちまつてるんだ。

——でも軀に悪いから。

そんなやりとりをしたうえ、彼はその傘を借りて帰った。それがおなかであつた。

傘を返しにいつてから、佐八はおながが忘れられなくなつた。雨の中をとんで来て、「でも軀に悪いから」と傘を貸してくれたとき、すでにその眼顔や声にひきつけられたらしい。それからむりに呼びだして、幾たびか入谷の田圃で逢つた。むりではあつたが、おなか拒まなかつた。そのうちに休みの日ができて、二人は谷中の天王寺でおちあい、佐八は自分の氣持をうちあけた。

——うれしいわ。

おなかは蒼ざめた顔でそう云つた。その「うれしいわ」という単純な言葉が、まるで朝顔の花が咲くのを見るような、新鮮ですがすがしい感動を佐八に与えた。

——うれしいけれど、だめなの。

蒼ざめた顔のままで、おなかはそつとかぶりを振つた。彼女には七人の弟妹があり、父が病身なので仕送りをしている。

それに女中奉公にはいるとき、向う十年の年期中、給銀を借りているし、仕送りの金も他の奉公人よりも多かった。それはおなかの父がもと越徳の店に勤めていたことと、店を出て担ぎ呉服をやつて来たが、その品も越徳から仕入れていた、という縁もあったのだが、いずれにせよ自分で自分のからだが自由にならないのだとおなかは話した。

——年期はどのくらい残つてゐるんだ。

——あと一年だけれど、仕送りの金が借りになつてゐるから、年期が明けても出るわけにはいかないのよ。

——借りた金を返せばいいだろう。

——義理というものがあるわ。

——人間の一生を縛るような義理はない、おれに任せてくれないか。

おなかとはかぶりを振つた。店を出るにしても、病身の父と弟妹が多いから、いっしょになればあなたの重荷になるだけだ、というのであつた。そのくらいのことはいさやないか、と佐八は云つた。自分には親もきょうだいもない、おまへの親はおれの親、おまへのきょうだいはおれのきょうだいだ。親きょうだいに貢ぐくらいのことではできるよ、と佐八は云つたのだ。

佐八はそれから精いっぱい稼いだ。月にいちど、入谷の田圃でおなかと逢つた。おなかの家は浅草山谷さんやにあり、毎月いちど、暇が出て父のみまいにいく、その日にうち合せをして逢い、田圃道を山谷の近くまで送るのであつた。佐八は酒の飲めるたちだったが、その酒もやめ、つきあいの遊びもやめた。ちようと友達なかまで新内節がはやっていて、佐八も半

年ばかり稽古にかよつていたときだったが、それもぴたりとやめて稼ぎに稼いだ。

こういうひたむきな気持が通じたのだらう、おなかもやがて心をきめ、年期があけたらいっしょになろうと約束した。佐八は家族に会いたいと云つたが、それだけはおなかが承知せず、家の近所へ近よることさえ、いじなくらい強く拒みとおした。

——いまはどうしてもいやなの、いっしょになるまで待つてちようだい。

理由はあんまりみじめだから恥ずかしい、ということであり、佐八もしいてとは云いかねた。けれども、あとでわかつたことだが、もつと深い、ぬきさしならぬ理由がほかにあつたのだ。

一年のち二人は夫婦になつた。佐八が親方へすべてを話し、親方が越徳へいつてくれた。越徳では渋つたが、借金をきれいに返し、自分が親代りになると云つて、ようやく承知をさせたのである。二人は下谷の山崎町に家を持ち、佐八は親方の店へ働きにかよつた。そうして約一年、穏やかでたのしい日が続いた。——佐八はしんそこおなかが可愛かつた。夫婦になるまえよりも、夫婦になつてからのほうがずっと可愛く、云いようのないほどいとしい者になつた。

「そして丙午ひのえうまの年の火事になりました」と佐八は静かに續けた、「——あれは二月末の昼火事で、下谷一帯から浅草橋まで焼けたのですが、私が金杉の店から駆けつけてみると、うちのあたりはいちめんの火で、近よることもできませんでした」

佐八はそこでまた水をすすった。

彼は気が狂いそうな思いで、おなかを捜し歩いた。そのとき金杉の店も飛び火で焼けたのだが、彼はそれさえも知らなかった。昼間ではあるし若い女一人の身軽だから、まさか焼け死ぬようなことはあるまい、どこかに逃げているのだと信じて、焼け出された人たちの集まっているところを、次から次と捜しまわった。そして明くる日、山谷は焼けなかったのだ、そこへ訪ねていったが、「おなかは来ない」というだけだった。それまで毎月の仕送りはしていたが、おなか嫌うので、佐八がその家を訪ねたのは二度めであり、家族の態度は冷淡を極めていた。

「まるで、娘を一人ぬすまれた、とでもいうようなあんばいでした」

佐八はそう云つて太息をついた。

金杉の店が焼け、親方夫婦は荏原えばらのほうの田舎へひっこんだ。佐八は友達の家で寝泊りをして、半月ばかり焼跡や、お救い小屋をたずね歩いたのち、ようやくおなかは死んだものと諦めあきら、すると急に気落ちがして、そのまま友達の家で寝こんでしまった。

「このむじな長屋へ越して来たのは、その年の七月のことでした」佐八は遠いなかを追ひ求めるような眼つきで云った、「やっぱり友達なかまの世話で、長屋の端に仕事場をくっつけ、注文を取るのも、仕上げた物を届けるのも自分でやり、めしもたいていは飯屋でかたづけるといぐあい。どうやら暢気のんきにくらすようになりました」

嫁を貰えと、うるさくすすめられたが、いつもあいまいに

話をそらして、彼は独りぐらしを続けていた。二年経つて二十八の年の夏、佐八は浅草寺の境内けいだいでおなかと出会った。四万六千日の日で、境内は参詣さんけいの人たちでいっぱいだったが、念仏堂の脇の人混みの中で、二人は真正面から出会い、お互いを認めて立竦たふんだ。

おなかは赤児を背負っていた。少し肥えたうえに髪かみの形も違つて、おも変りがしていたのに、佐八は一と眼でおなかだと気づき、彼女のほうでもすぐに彼だということを認めた。

——しばらくだったね、と佐八が云った。

——しばらくでした、とおなが答えた。

混みあう人のために押されて、二人は奥山のほうへと歩いていった。

九

境内を一と廻りしたうえ、隨身門ずいしんもんから外へ出ると、佐八は蕎麦屋そばやをみつけて、おなかといつしよにはいり、その二階へあがった。二階には客がいず、おなかは赤児をおろして、乳を含ませた。

——おまえの子だね。

——ええ、太吉つていうんです。

——もう誕生ぐらいか。

——九月めです。

佐八は胸を抉えぐられるように感じた。

「鑿のりかなんか突込まれて、ぐいぐい抉られるような気持ちでした」佐八はちよつと眉をしかめた、「——憎らしいとか、くや

しいとかいうのではなく、ただもういじらしくって哀れで、……おかしなはなしです、自分の女房が他人の子を産み、眼の前でその子に乳を飲ませているんですから、本当なら思う存分やりこめたうえ、半殺しにでもしてやるところでしよう、それがただもう哀れで、哀れで、もしできることなら、抱き緊めていっしょに泣いてやりたいような気持でした」

登はふところ紙を出して、そつと佐八の額の汗を拭いてやった。

そのときはそれで別れた。佐八はなにも訊かず、おなかもなにも話さなかった。蕎麦が来たが、二人とも箸をつけないままで、やがて立ちあがり、佐八が赤児を背負わせてやった。

——仕合せにやつてるんだね、と佐八が訊いた。

——ええ、とおなかは口の中で答えた。

——もう逢えないだろうな。

おなかは答えずに、背中の子をゆすつていた。蕎麦屋を出たところで別れ、佐八が見送っていると、曲り角のところでおなかが振り返り、こつちを見ておじぎをした。

「それから五六日、私はまったく仕事の手につかず、久しいこと口にしなかった酒を飲んで、酔っては寝、酔っては寝るという始末でした」佐八はそつと頭を振った、「自分の軀の半分がおなかのほうへ取られて、おなかのやつといっしょに苦しんでいる、といったような気持でした、どういうわけなのか、やつぱり憎いとかくやしいという気は少しも起こらない、別れたときのうしろ姿、振返っておじぎをした姿が眼にうかぶと、ただもう哀れで哀れで、息が止まるように苦しくなるんです」

そして或る日の夕方、むじな長屋へおなかを訪ねて来た。佐八は酔つて寝ころんでいた。おなかは赤児を伴^りれていず、うちへはいるとその手で入口の雨戸を閉め、あがつて来て、そつと佐八の側へ坐った。佐八はおなかだということにすぐ感づいた。雨戸を閉める音でおなかだなと思い、それが少しも意外でないことに気づいて、却つておどろいたくらいであった。

——車坂の利助さんに訊いて来ました、とおなかは囁き声で云った。

——ああ、利助にはいろいろ世話になった。

——その話も聞きました、済みません、かにんして下さい。

佐八は呻き声のもれるのを抑えるために、全身の力をふり絞った。彼は静かに起きあがつて、行燈をひきよせた。すでに時刻でもあるし、表の雨戸を閉めたので、部屋の中は夜のように暗かったのだ。

——どうか灯をつけないで下さい。

おなかはそう云つて泣きだした。

——かにんして下さらないんですか。

——わからない、と佐八は呻くように云った。自分でもそこがわからない、けれども、生きていてくれてうれしかったとは思ふよ。

——わけを聞いて下さいますか。

——おまえがつらくなければな。

おなかは沈黙した。嗚咽^{おえん}をしずめるためだったろう、暫くしてそつと涙^{なみだ}をかみ、そうして、感情をこころした平べったい

ような調子で語った。

彼女には約束した男があつたのだ。山谷にいる父の友達の子で、親の家をとびだして来、同じ町内に住んで、大工の間取りをしていた。おなかと同じ年だったが、十六七のころから「おれはこのうちの人間になるんだ」と云つて、稼いだ物をおなかの家族に貢いでいた。二十歳になったとき、はつきりおなかが好きという、彼女の親達はよろこんで承知した。

——あたしがそれを知つたのは、あなたから話を聞くちよつとまえのことでした。

彼女の気持はまだはつきりしていなかつた。その男が嫌いではなかつたし、自分たちの家族がして貰つたことに恩義も感じていた。しかし、その男の妻になるということは、まるでひとごとのように実感がもてなかつた。そのとき佐八に会つたのである。おなかは佐八に強くひきつけられた。はつきり事実を云つて、断わらなければいけないと思ひながら、自分で自分がどうにもならず、なかば夢中で、佐八にひきずられていった。

——だつてどうしようもなかつたのよ。

おなかはそう云いながらまた泣きだし、声を忍んで、ながいこと嗚咽していた。

やがておなかは心をきめた。佐八といつしよになろう、恩義は恩義、あとでどうでも返す法はあるから。そう決心して、越徳の主人にも話し、山谷の親たちにも話した。自分でもこわいほど強い気持になり、涙もこぼさずにねばりぬいた。……佐八の親方が話しにいったとき、越徳の主人が渋つ

たのも、また佐八が山谷の家を訪ねたとき、家族の者がひどく冷淡だったのも、それだけの理由があつたからなのだ。そして二人はいつしよになった。約一年の生活は、おなかにとって一生に代えても惜しくないほど、仕合せな、満ち足りたものであつた。

——あなたとの一年で、あたしはこの世に生れて来た甲斐があつたと思ひました、こんなに仕合せでいい筈はない、このままではいまに罰が当るにちがいないって、独りのときはよく考えたものです。

火事するとき、おなかの頭に閃いたのは、この「罰が当るにちがいない」という考えであつた。そんなばかなことがと、火に追われて逃げながら、自分の愚かしい考えを、否定したが、否定すればするほど、そのおもひは強くなるばかりだった。

もう人の一生分も仕合せにくらした、この火事がその証拠だ。

この火事が、区切りをつけるという証拠だ。そういう言葉が、誰かの囁きのように、頭の中ではつきりと聞えるようであつた。佐八は自分が焼け死んだと思うだろう、それで一切のけりがつく、けりをつけるときが来たのだ。そんなふうに思ひながら、ふと気がつく、山谷のうちの前に立っていた。

——それからのあたしは、本当のあたしじゃあなく、べつの人間になつたような気持でした。

本当の自分は佐八のところにいる、ここにいるのは自分とは違ふ人間だ、おなかはそう思った。事実、それから腑抜けにでもなつたようで、親の云うままにその男と夫婦になり、

本所のほうで世帯をもった。

十

それから二年、太吉という子供も生れて、その男との生活も、それなりにおちついて来たと思つたとき、浅草寺で佐八と出会つた。

おなかは眼がさめたように思つたという。長いこと眠つていて、そのときふつと眼がさめたような氣持だつた。神隠しにあつた者がひよいと自分の家へ歸つた、とでもいうような氣持で、火事からあとのことは、現実のものではないように感じられてきた。

——いまでもそうなの、いまこうして話しているのがあたしだということはわかるけれど、ほかに良人^{おと}や子供を持つた自分がいるとは、どうしても考えられないのよ。

そう云つておなかは身もだえをした。

——あたしそれで、あなたのところへ歸つて来たの、わかってくれるわね、あなた、あたし歸つて来たのよ。

——それは本気で云うのか。

——抱いてちょうだい。

——また向うへ戻りたくなるんじゃないのか。

——お願いよ、抱いて。

佐八はそつと、おなかを抱きよせた。おなかは片手でなにかを直し、それから双の腕を佐八に掛けて、力いっぱい抱きつき、同時に「ひ」と短く、するどい悲鳴をあげた。

——放さないで。

おなかはしがみついたまま云つた。

——あたしを放さないで。

そしておなかは絶息した。

「左の乳の下を、ヒ首^{あいくち}で」と突きでした」と佐八は云つた、「医者をおわくまでもない、一と突きで即死です、……これでもうおわかりでしょう、あいつは放さないでくれと云いました、私も放したくはなかった、いちどはそのヒ首を手を取つてみたが、おなかのやつが死んではいけないと云っているようで、死ぬことは諦めました、そして、そうです」

佐八は咳^{せき}こんだ。体力が消耗しきつているため、軀を折り曲げ、枕を両手で押^おんで、いまにも息が絶えるかと思うほど、苦しげに咳^{せき}いつた。登はすり寄つて、骨のあらわな背を撫^なでてやり、咳がおさまるのを待つて、そつと水をすすらせた。「そうです」佐八は暫くして、しゃがれた弱々しい声で云つた、「昨日この裏で掘り出されたのが、おなかです、崖崩れのあるまえには、あそこが私の仕事場でした、私は仕事場の下におなかを埋めて、ずつといつしよにくらして来たのです」

近所の人たちにしたことは、おなかに対する供養の氣持だつた。決して感謝されたり、褒められたりするいわれはない。おなかの良人や子供がどうなつたかは知らないが、自分はいつかに悲しいおもいをさせ、おなかを殺したも同然である。いつかはこの事実のあばかれるときが来るだろう、それまではおなかへの供養と、自分の罪ほろぼしのために、少しでも人の役に立つてゆきたいと思つた。

「迎えが来た、と云つたのはこういうわけだったのです」と佐八は云つた、「——昨日、裏で人の騒ぐ声を聞いたとき、私

はああそうかと思いました、おなかが迎えに来た、これで本当
に二人がいっしょになれる、これでやっと安楽になれるん
だって」

上り框にござ寝をしていた平吉が、とつぜん唸り声をあげ、
水を持って来い、とばかけた高声で喚きだした。

「差配の因業じじい、お梅ばああのみつたれ」と彼は喚い
た、「佐八のばか野郎、赤髯のへちやむくれ、おめえらはみん
な大ばかりのひよつとこだ、へつ、どうせこの世は二合五勺よ、
むずかしい面あしたって底は知れてらあ、酒でもひつかけて
酔っぱらうほかに、——やい、聞えねえのか、水を持って来
い」

「保本先生」と佐八が云った、「どうか、差配のところへいつ
て、そう仰しゃって下さい、その骨はおなかで、私が埋めた
ものだって、——よけいな手数が省けますからね」